審査の結果の要旨

氏名　河村俊太郎

東京帝国大学は日本の近代化過程における学術研究の推進において先導的な役割を果たしたところであるが、その中での図書館の位置づけについては十分に解明されていなかった。本論文は、蔵書の分析を通じて図書館が教官の研究にとってどのようなものだったのかを明らかにしようとしたものである。その際に、東京大学において個々の部局の独立性が高いことに鑑み、典型的な２つの部局図書室と全学的な附属図書館（現総合図書館）の蔵書を中心に検討を行い、そこから知識基盤の有り様を探ることにした。

全体は６章よりなる。まず、第１章では議論の前提になるこの大学における図書購入にかかわる制度を概観し、部局図書室にも単一の図書室に集中しているところと学科、研究室ごとに分散して行われているところの２種類があったことを確認した。

第２章では分散的な運営を行っていた文学部のなかで心理学研究室、第３章では集中的な運営を行っていた経済学部を取り上げて、図書室の蔵書記録を調査し、年度によって購入された図書がそれぞれの組織の研究者の研究内容とどのように関わっていたのかを分析した。その結果、いずれの蔵書も教官が担当する個別の研究分野を支援する蔵書であるよりは、それぞれの部局の研究領域全体を反映するものになっていたことを明らかにした。

第４章では中央館である附属図書館の蔵書のつくられ方について検討し、学問的な知識をもった司書・司書官が資料選択をおこなおうとしていたが、十分な予算がなかったことと、とくに関東大震災以降は外部からの寄贈図書が多かったことのために、教官の研究のための蔵書にはなっていなかったと結論づけた。こうして、部局図書室も附属図書館も教官にとって直接研究の補助となる存在ではなかったとするとき、研究に直接使われた資料は教官の私蔵書として集められたものであったことを示唆した。

続いて５章と６章では東京大学図書館全体を考察した。第５章では全部局と附属図書館の関係者が議論する場としての図書館商議会を取り上げ、この組織が個々の部局の代表者が全学的附属図書館に働きかける場であったことを明らかにした。そして第６章では、近代の大学設置モデルを、研究を重視するドイツ型と教養教育を重視するアメリカ型に分けて考えるときに､初期の附属図書館長がアメリカ型を採用して運営しようとしたのに対し、部局図書館はドイツ型の考え方を中心としていたと論じている。また、大学全体としてみると、欧米の大学のように図書館の蔵書が統一的な学問体系をカバーするという理念を欠いていたところに違いを見出している。

本論文は、文学部心理学研究室と経済学部図書室の蔵書記録を分析することでそれぞれの蔵書内容を明らかにし、また、図書館商議会の議事録を用いて議論を整理するなど、入手できる一次資料を存分に用いて研究を行った。このようにして東京大学図書館蔵書の全体的な構造と所属する教官の研究との関係を明らかにし、さらにそれを国際的なコンテクストに位置づけた。審査委員会は、こうした内容をもった本論文が博士（教育学）を授与するにふさわしいものであると結論づけた。